The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	名詞に接続する「などj の意味・機能 ： 明治期と現代との比較を中心に
Author(s)	陳, 連冬
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2003, 37, p. 11-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56478
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

名詞に接続する「など」の意味・機能

── 明治期と現代との比較を中心に ──

陳　　連　冬

1．はじめに

現代日本語の「～など」には、基本的に「例示」と「否定的評価」の２つの意味・機能があるとされる場合が多い。しかし、この２つの意味・機能が歴史的にどのように変化してきているかについての研究はあまりなされていないように思われる。本稿では、現代と明治期の小説の用例を調査し、その比較を行なってみたい。

この点を考察するにあたって、次の３つの側面に注目して分析した[1)]。

①「など」の前接名詞が１つ（＜１項＞）なのか複数（＜多項＞）なのか

②「など」が＜単独＞で用いられるのか、＜非単独＞[2)] で用いられるのか

③「など」を含む文の述語が＜肯定＞なのか＜否定＞なのか

2．明治期と現代との量的比較

比較のために、明治期の小説17編、現代（1980年～2000年）の小説11編から「～など」の全用例を収集した。そのうち、名詞に接続する用例を上述の観点で分類すれば、次のような分布になる[3)]。

この分布からは次の３つの点が指摘できる。

①＜単独用法＞は、明治期では殆ど用例が見られないのに対して、現代では非常に多く見られる。

②基本的に、現代に見られる＜単独用法＞は＜１項・否定＞に集中している。

③＜非単独用法＞は、明治期は＜１項＞の方に偏るのに対して、現代（80年以降）はそのような偏りが見られない。

以下、明治期と現代を分けて、考えていく。

表１　名詞接続の「など」の分布

	非単独（格助辞）4)				非単独（とりたて助辞）5)				単　独				計
	１項		多項		１項		多項		１項		多項		
	肯	否	肯	否	肯	否	肯	否	肯	否	肯	否	
明治	123	19	24	1	114	49	8	1	3	1	0	0	342
現代	74	14	74	6	32	22	17	3	63	176	3	1	485

3．明治期の場合

3.1 格助辞を伴う＜非単独用法＞

＜非単独用法＞は、格助辞と共起する場合ととりたて助辞と共起する場合に分けて考えた。明治期と現代の用例数を比べると、前者は＜１項＞に偏っているが、後者は特に偏りを見せない。ここではまず格助辞と共起する場合を見る。

3.1.1 ＜多項＞の場合

前接する名詞が複数ある＜多項＞用法の「など」は、基本的に＜肯定述語＞で受けて、同類のものごとの存在を表す「例示」の機能を果す。（２）のように＜多項＞は、＜否定述語＞で受けても「例示」を表す。

（１）「それからことによると、僕の事だの母の事だの、家庭の事などが兄の口に上るかも知れませんが、（後略）」（行）

（２）その頃こそ「魔風恋風」や「金色夜叉」などを読んではな

らんとの規定も出ていたが、(後略)。(蒲)

3.1.2 ＜１項＞の場合

＜１項＞の場合、述語が＜肯定＞であれば、「例示」の意味になる。

(3) 酒が出た。幹事が挨拶をした。その中に侯爵家から酒を寄附せられたという報告などがあった。(青)

しかし、述語が＜否定＞である場合は、「例示」を表すもの(4)の他に、話し手の「否定的評価」を表すもの(5)(6)も現れてくる。

(4) 自分は小説などをそれ程愛読しない嫂から、始めてこんなロマンチックな言葉を聞いた。(行)

(5) けれども根が執念深くない性質だから、これしきの事で須永に対する反抗心などが永く続きよう筈はなかった。(彼)

(6) ああ、老いたくない、朽ちたくない、何時までも同じ位置と名誉とを保っていたい、後進の書生輩などに兜を脱いで降参したくない。(破)

3.2 とりたて助辞を伴う＜非単独用法＞

明治期、現代ともに用例があるが、明治期は＜１項＞に偏る。

3.2.1 「は」の場合

3.2.1.1 ＜多項＞の場合

明示的に複数のものごとを並べた後に「など」が用いられた場合、「例示」を表す。肯定述語の例しかなく、否定述語の例はない。

(7) 「その時分の僕は随分悪もの食いの隊長で、蝗、なめくじ、赤蛙などは食い厭きていた位なところだから、蛇飯は乙だ。(後略)」(吾)

3.2.1.2 ＜１項＞の場合

しかし、前接する名詞が１つだけの＜１項＞の場合、述語が＜肯定＞で

あれば同類のものごとの存在が前面化して「例示」を表し、<否定>であれば同類のものごとの存在は後退して「否定的評価」を表す。(8)は「例示」、(9)(10)(11)は「否定的評価」である。

(8) 今自分の前に坐っている叔母は、(中略)、叔父が死んだ今日でも、何不足のない顔をして、腮などは二重に見える位に豊なのである。(門)

(9) そう思うので、自分からは宗教問題の事などは決して言い出さない。(か)

(10) 「夫婦の愛はその一つを代表するものだから、(中略)。――がどうでしょう先生」と東風君は相変らず真面目で迷亭君の方へ向き直った。「御名論だ。僕などは到底絶対の境に這入れそうもない」(吾)

(11) 親爺は戦争に出たのを頗る自慢にする。稍もすると、御前などはまだ戦争をした事がないから、度胸が据らなくって不可んと一概にけなしてしまう。(そ)

ただし、次のように述語が<肯定>の場合でも、「例示」とは言えない場合がある。前接する名詞は指示代名詞や固有名詞が多い。

(12) 「(前略)。それで私は業が深くて悟れないのだと云って、毎朝厠に向って礼拝された位でありましたが、後にはあのような知識になられました。これなどは尤も好い例です」(門)

(13) それにこの人目を忍んで間食をするという癖は、何も吾等猫族に限った事ではない。うちの御三などはよく細君の留守中に餅菓子などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬している。(吾)

一方、次のように、述語の文法的形態が<肯定>であっても、意味的に

は<否定>である場合には[6]、「否定的評価」を表す。このような用例は明治期に非常に多い。

(14)　迷亭は（中略）忽ち「活動切手などは何千万枚あったって粉な微塵になってしまうさ。(中略)。」と云って退けると、(後略)。(吾)

(15)　「(前略)。ことに先の巻烟草入の出所などは甚だ疑わしい。そう云えばこの烟草も何となく妙な臭がするわい」(虞)

3.2.2 「も」の場合

3.2.2.1 <多項>の場合

<多項>の場合は<肯定述語>の例は見つかっていないが、<否定述語>で受けても、「例示」を表す。

(16)　尻尾の曲がり加減、足の折り具合、物憂げに耳をちょいちょい振る景色なども到底形容が出来ん。(吾)

3.2.2.2 <1項>の場合

<1項・肯定>の場合は、「例示」を表す。<1項・否定>の例は3例しかなく、すべて「私」のような人称代名詞が「など」に前接している。(18)は「例示」ではないが、しかし強い「否定的評価」とも言えないかもしれない。

(17)　「御忙しいでしょう」「まだ荷物などもそのままにしております……」(虞)

(18)　「え、難有う。なに暑い位でそんなに変りゃしませんや。然しこの暑さは別物ですよ。どうも体がだるくってね」「私しなども、ついに昼寝などを致した事がないんで御座いますが、こう暑いとつい――」(吾)

3.3 格助辞もとりたて助辞も伴わない<単独用法>

前述のとおり、今回の調査では、明治期に＜単独用法＞は4例しかなかった。そのうち、＜1項・肯定述語＞は3例、＜1項・否定述語＞は1例である。＜多項＞の用例はない。

(19) 「(前略)。私も人間であるから時には大きな声をして歌などうたってみたくなる事がある。(後略)」(吾)

(20) 時雄は夜などおりおり芳子を自分の書斎に呼んで、文学の話、小説の話、それから恋の話をすることがある。(蒲)

(21) 「芳子さんにも困ったものですねと姉が今日も言っていましたよ、男の友達が来るのは好いけれど、夜など一緒に二七（不動）に出かけて、遅くまで帰って来ないことがあるんですって。(後略)」(蒲)

(22) 元々村へ出るには、沢辺まで降りて、沢伝いに里へ下るのだから、俄雨で谷が急に一杯になったが最後、米など背負って帰れる訳のものでない。(彼)

4. 現代の場合

4.1 格助辞を伴う＜非単独用法＞

4.1.1 ＜多項＞の場合

＜多項＞の場合は、明治期と同様、述語が＜肯定＞でも＜否定＞でも「例示」の意味を表す。

(23) 流しに行って、小麦粉にまみれた丼や、油だらけの鍋などを洗う。(女：146)

(24) 現在は、VHF 帯の基幹系無線と同様、傍受や妨害などがされないように、全国ほとんどの署活系もデジタル化が完了していたが、(後略)。(ホ：150)

4.1.2 ＜1項＞の場合

＜１項＞の場合は、述語が＜肯定＞のときは、「例示」を表す。

(25)　気に入った民芸家具などを置いて、帰ってきて畳の部屋でくつろぐ。(女：86)

述語が＜否定＞の場合は、明治期と同様、「例示」になる場合もあるし、「否定的評価」になる場合もあり、中間的性格を持つ。例えば、(26)は「例示」が前面化し、(27)(28)は「否定的評価」が前面化している[7]と思われる。

(26)　主任は、貴子の言葉を手で制し、分かっていると言うように再び頷いた。貴子は、本部事件などに関わっていない時には、日頃一緒に仕事をしている仲間が、どれほど貴重で有り難い存在かを改めて感じながら、微かにため息をついた。(凍：194)

(27)　人間よりも、よほど豊かな感情を持っている、決して凶暴さなどを感じさせるものではない。(凍：337)

(28)　――聞かなきゃよかった。何も、滝沢の人生などに興味はなかったのだ。(凍：148)

4.2 とりたて助辞を伴う＜非単独用法＞

4.2.1「は」の場合

4.2.1.1 ＜多項＞の場合

明治期と同じく、＜多項＞の場合、＜肯定述語＞の(29)は勿論、＜否定述語＞の(30)でも「例示」を表す。

(29)　自分だけが正しいと思う、奇妙な思い込みや、力みすぎ、自意識過剰などは、掃いて捨てるほど見てきた。(凍：100)

(30)　雛子を共有するということの照れ臭さや腹のさぐりあいなどは何ひとつなく、信太郎と副島はこれ以上ないと思われ

るほど友好的に、話に花を咲かせていた。(恋：171)

4.2.1.2 ＜1項＞の場合

＜1項＞の場合は、＜肯定述語＞では、(31)のように「例示」を表し、＜否定述語＞では、(32)(33)のように「否定的評価」を表す。

(31) 今夜もこのまま現れてはくれないのだろうか。寒さには強いのだろうが、例えば食べ物などは、どうしているのだろう。(凍：447)

(32) だが、もうやつらは決して油断などはしないはずだ。(ホ：244)

(33) 塚越警視が、配布された資料に目を落としながら、嘆くようにいった。正直な感想なのだろうが、電力所の関係者への配慮などはまったくない。(ホ：199)

ただし、次のように固有名詞に接続した「など」の場合は、＜肯定述語＞であっても、「例示」ではないようである。

(34) いっこうに受話器を取り上げようとしない相手に対し、戸塚などは、ダムの封印を解き、息の根を止めに行くことを、ウツギに提案したほどだった。(ホ：309)

(35) たとえば埼玉県などは直轄犬がいないため、警察犬が必要な際には、全て嘱託犬が出動することになる。(凍：252)

一方、形は＜肯定＞だが意味的には＜否定＞である述語の場合は、「否定的評価」が前面化する例もある。

(36) 自然の猛威の前に、人間の多少の経験などは、いとも簡単に吹き飛ばされてしまう。(ホ：7)

4.2.2「も」の場合

4.2.2.1 ＜多項＞の場合

＜多項・肯定述語＞の(37)は、「例示」を表す。＜否定述語＞の例は見つ

かっていない。

(37)　もしかすると、火災の折に携帯していて消失したのではないかと思われた預金通帳やパスポートなども、全てが金庫から発見された。(凍：128)

4.2.2.2 ＜1項＞の場合

＜1項・肯定述語＞の(38)は「例示」を表す。＜1項・否定述語＞の(39)も「例示」を表す。

(38)　「これからは少しずつ、社内報作りなどもやってもらうわけだからね」いつになく厳しい調子で課長は言う。(女：274)

(39)　≪……。この近辺は、縦横に運河が流れる倉庫街で、深夜になると人影は途絶え、犬を散歩させる人などもあまり見かけないという。……。≫(凍：173)

4.3 格助辞もとりたて助辞も伴わない＜単独用法＞

明治期にはあまりなかった＜単独用法＞は、現代において、＜1項・否定述語＞に集中しており、しかも＜1項・肯定述語＞の例の大部分は、意味的に見れば＜否定＞である。＜多項＞がほとんど存在しない＜単独用法＞は、現代において、「否定的評価」を表す専用の形式として発達したものではないだろうか。

4.3.1 ＜1項・否定述語＞の場合

これは、現代において、最も多いタイプである。すべて、「否定的評価」を表す。

(40)　しかしときおり哀れっぽい目で見上げられたりすると、ついかばってしまう。しかし男の社員は、紀子など、はなから相手にしない。(女：66)

(41)　(前略)。頭痛が烈しくなった。味など何ひとつ、わからな

かった。(恋：197)

(42) これから、またあの皇帝ペンギンと一日を過ごすのだ。こちらの心理状態など、絶対に読まれてはならないと思った。(凍：188)

(43) 建設当時の採石場など、どんな登山地図を取り寄せたところで、記載されてはいなかった。(ホ：144)

4.3.2 <1項・肯定述語>の場合

文法的には<肯定述語>であっても、次のように意味的には<否定>である場合[8]がほとんどである。そしてやはり「否定的評価」を表している。

① 疑問形式、特に反語などによって否定的な意味を表すもの

(44) なぜもっと早く開閉所までたどり着くことができなかったのか、どうして途中でビバークなどしたのか、そう考えた自分の浅はかさを、千晶は今、身をもって感じ取っていた。(ホ：610)

(45) しかし最低限、自分のことが自分でできない人間に、結婚する資格などあるだろうか。(女：151)

② 接頭辞「無」などを伴う場合

(46) となれば、こんな電話など無意味だ。(タ：50)

(47) 問題は給料の額であり、雇い主の品性など、無関係だった。(恋：53)

③ 「～シテシマウ」を伴うもの

(48) 反射的に、こんな犬に襲われたら、自分など簡単にかみ殺されてしまうだろうと思った。(凍：429)

④ 語彙的意味上否定のもの

<不可能>系：

(49) とすれば、趣味的なリースは別として、土産物の手作りな

ど無理にきまっている。(女：492)

<困難>系：

(50)　動物の好きな者には手応えのある仕事に違いないが、家庭のある人間にとっては犠牲にするものも多い。家族旅行など夢のまた夢、自分の子どもたちよりも犬の心配をし、犬の性格や癖ばかりを把握して過ごす。(凍：380)

<欠如・消滅>系：

(51)　平木その人を前にしてみると、熱い思いが込み上げ、理性的な思考など、どこかに消えていった。(女：311)

<マイナス評価>系：

(52)　「俺はな、やたらと目を地走らせた、ただの粗暴なだけの犯罪者と一緒にされるのは、我慢がならないんだよ。暴力にものをいわせて金を奪うだけなら、どんな馬鹿にでもできる。知性も美学も志のかけらもないような犯罪など、俺はごめんだ。だから、おまえやここの所員たちも、無駄に手荒に扱うつもりは最初からなかった」(ホ：312)

<構わない>系：

(53)　すべて、おまえの望むままにしてきたではないか。家などどうでもよかったが、おまえが欲しいと切実に迫るので、酒もタバコもやめた。(皆：32)

⑤　コンテキスト上、否定の評価があると思われるもの

(54)　(前略)、普通ならば後輩である貴子に指図して報告書を作成させ、自分はコーヒーでも飲んでいれば良いものを、嫌味たらしく首など回しながら、どうにかこうにか数枚の報告書を書き上げている。(凍：89)

なお、数は多くないが、「否定的評価」を表さないものはないわけではな

い。まずは時間を表す形式に接続する場合が挙げられる。

(55) かと思うと、夕暮れ時に、信太郎と別荘の回りの小径を散歩している時など、だしぬけに彼から抱きすくめられることもあった。(恋：296)

(56) だから、両親の家を訪ねて無駄話をしているときなど、本間は、ふと自分一人が浮き上がったような気がすることがあった。(火：235)

また、時間を表す形式でなく普通の名詞に接続する場合でも、ごく一部「否定的評価」を表さない場合がある。

(57) 私は注文もしないのにでてきたウインナコーヒーを啜り、あくびなどしてみる。(皆：209)

4.3.3 ＜多項＞の場合

＜多項＞は非常に少ないが、述語が＜肯定＞の場合は、「例示」を表す。

(58) 友だちの話によると、そこには「やせる薬」「精力がつく薬」など、何でもあるそうだから、もしかしたら棚の奥のほうに、「淫乱が治る薬」もこっそりとしまってあるかもしれない。(無：98)

次のように、述語が＜否定＞の場合は、「例示」か「否定的評価」か決めがたいように思われる。

(59) 色男を追っているのは、一般常識や法律など通用しないアウトローである。(皆：332)

ただし、次のように、述語形式が＜否定＞であっても、意味的に＜肯定＞である場合は「例示」になる。これは＜１項＞の場合と逆の傾向である。小説の例がないので、論述文の例を挙げる。

(60) これに対し、英語では「喜び」や「楽しさ」を表す語が多い。Joy, gladness, delight, pleasure, enjoyment,

happiness, amusement など、限りがない。(日：160)

(61)　特に水分がどのくらい含まれているのかがとても重要な要素になる。例えば「ニチャニチャ」「ヌルヌル」「ベタベタ」「ネトネト」「サラサラ」「パリパリ」など、枚挙にいとまがない。(日：203)

5. まとめと今後の課題

本稿の要点は、以下のようにまとめられる。

① 明治期には＜単独用法＞は基本的にみられない。逆に現代は＜単独用法＞が多い。しかもほとんどが＜1項・否定述語＞のもので、「否定的評価」を表している。また、文法的には＜肯定述語＞であっても、意味的に考えれば＜否定＞のものが多く、やはり「否定的評価」を表している。＜単独用法＞は現代において、「否定的評価」を表す専用の形式として勢力を増していると思われる[9]。

② 一方、＜非単独用法＞では、明治期と現代との間に違いが見られない。「など」に前接する名詞が＜多項＞の場合もあれば、＜1項＞の場合もある。述語の形は肯定が多い。これらは、話し手の「否定的評価」を表さず、前接名詞が表すものごとと同類のものごとがあることを表す「例示」の用法である。

③ 以上の①②に見られる事実は、明治期から現代にかけて、「例示」の用法から「否定的評価」を表す用法が発展してきたことを示していると考えられる。これはすなわち、同類のものごとの存在を示す客観的用法から、話し手による否定的な評価という主観的(主体的)な用法への展開である。

④ なお、「これなどは尤も好い例です」、「戸塚などは、ダムの封印を解き、息の根を止めに行くことを、ウツギに提案したほどだった」

のように、「例示」とは考えにくいものがある。このような事実は、指示詞や固有名詞などを含めた前接する名詞のタイプの分析、「は」などの共起するとりたて助辞の有無といった考察を、今後さらにする必要があることを示すものである。

なお、今回は述べられなかったが、明治期の「なぞ」という形式の場合においても、＜単独用法＞は3例しか見当たらなかった。今後は、さらに、「なぞ」や「なんか」についても考察していきたい10)。

注

1) 「など」は名詞以外（文（動詞・形容詞）、引用の助辞「と」）にも接続するが、明治期も現代も名詞に接続する場合が大部分であるため、今回は名詞接続の場合に特に焦点をおいて述べている。また、「など」と「なんか」「なぞ」を音声的違いとしてのみ扱う研究もあるが、これらは必ずしも意味・機能が同じではないため、本稿では「など」に限って述べることにする。なお、「ラーメン屋、鮨屋などの広告」や「八丈島・沖縄など南方諸島に卓越するイモ耕作」のような、述語と直接かかわらない用法は今回対象外とした。

2) 「統一性などを求める」のように、格助辞や他のとりたて助辞と共起する場合を＜非単独用法＞と呼び、「統一性などない」のように、他の助辞と共起しない場合を＜単独用法＞と呼ぶことにする。

3) 用例は明治期のもの全部で602例、80年以降のもの939例を収集しているが、名詞に接続するものは、明治期のもの343例、80年以降のもの485例である。

4) 「が」「を」「に」「で」「と」「から」「まで」「へ」、及び明治期には連体修飾節の主格を示す「の」などがある。

5) 「には」「にも」「では」「でも」「とは」「とも」「からも」「までは」「へは」「よりも」など、格助辞ととりたて助辞を重ねた形式と共起する非単独用法もあるが、明治期においても現代においてもそれぞれ1，2例しか見当たらない場合がほとんどなので、今回は分析の対象外とした。

6) 工藤（1999）に、「語彙的否定形式」についての詳しい論述がある。例えば、(14)の「～てしまう」形式の使用や、「粉な微塵になる」のような語彙的に＜欠如・消滅＞を表す述語、(15)の「疑わしい」といった否定的

評価を伴う述語などの使用によって、否定的意味を表していると思われる。

7)　現代の格助辞「～に」を伴う場合には、次のように「～などに」だけでなく、「～になど」の形で用いられるものも12例ある。いずれも＜否定述語＞で受けて、「否定的評価」を表している。「買ったばかりのリサのエレッセのウェアになど一瞥もくれないし、夜のドライブをするわけでもない」(女：46)、「「人質はおまえだけじゃない。……いや、本当は人質になど、何の価値もない。おまえらには虫けらほどの値打ちもない」」(ホ：314)。

8)　工藤 (1999) を参照されたい。

9)　なお、80年以降の小説と論述文における＜単独用法＞と＜非単独用法＞の分布を次に挙げる。これによると、「否定的評価」を表す＜単独用法＞は、小説には多いが、論述文には少ない。おもに「例示」を表す＜非単独用法＞は、論述文の数が占める割合は目立つのである。

表2　単独用法

小　説	243
論 述 文	64

表3　非単独用法

小　説	242
論 述 文	175

調査に用いた論述文の出典は以下のとおりである。古森義久 (1995)『大学病院で母はなぜ死んだか』中公文庫 (1998)、大林太良 (1990)『東と西海と山』小学館 (1996)、岡田光世『ニューヨーク日本人教育事情』岩波新書 (1993)、田中宏『在日外国人』岩波新書 (1991)、岡田英弘 (1997)『この厄介な国、中国』WAC BUNKO (2001)、金田一春彦『日本語を反省してみませんか』角川 ONE テーマ (2002)、和田正平 (1994)『裸体人類学』中央公論

10)　また、1)で述べたように、連体用法の場合は、本稿では対象外としているが、明治期と現代との間に次の表のような違いが見られる。用例数が少ないため確定的なことは言えないが、「NなどN」のパターンは明治期には見られないようである。この点についての考察は今後の課題とする。

表4　連体用法の「など」の分布

	NなどのN		NなどからのN		NなどとのN		NなどN		合計
	1項	多項	1項	多項	1項	多項	1項	多項	
明治期	12	8	0	0	0	0	0	0	20
現　代	17	27	0	2	0	1	6	19	72

用例出典

※作品の最初の文字に引いた下線は提示用例の略称を示すもの。

明治期

島崎藤村『破戒』(明治39)、田山花袋『蒲団』(明治40)、夏目漱石『坊ちゃん』(明治39)、『それから』(明治42)、『倫敦塔』(明治38)、『吾輩は猫である』(明治38)、『虞美人草』(明治40)、『行人』(明治45)、『三四郎』(明治41)、『草枕』(明治39)、『彼岸過迄』(明治45)、『門』(明治43)、森鷗外『かのように』(明治45)、『青年』(明治43)、『エタ・セクスアリズ』(明治42)、『雁』(明治44)、『妄想』(明治44)

現代(80年以降)

村上春樹(1983)『中国行きのスロウ・ボート』中公文庫(1986)、北村薫(1997)『ターン』新潮文庫(2000)、篠田節子(1997)『女たちのジハード』集英社文庫(2000)、鷺沢萠(1996)『夢を見ずにおやすみ』講談社文庫(1999)、小池真理子(1995)『恋』ハヤカワ文庫(1999)、花村萬月(1997)『皆月』講談社文庫(2000)、群ようこ(1991)『無印失恋物語』角川文庫(1992)、真保裕一(1995)『ホワイトアウト』新潮文庫(1998)、北村薫(1994)『水に眠る』文春文庫(1997)、乃南アサ(1996)『凍える牙』新潮社文庫(2000)、宮部みゆき(1992)『火車』新潮文庫(2000)

参　考　文　献

植田瑞子(1991)「現代語における副助詞ナドの分布と特性」『日本語学』10-5, 明治書院

工藤浩(1977)「限定副詞の機能」松村明教授還暦記念会編『国語学と国語史』明治書院

工藤真由美(1999)「現代日本語の文法的否定形式と語彙的否定形式」『現代日本語研究』6, 大阪大学

国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞 ── 用法と実例 ──』秀英出版

鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味III』くろしお出版

沼田善子(2000)「3取り立て」金水敏、工藤真由美、沼田善子『時・否定と取り立て』岩波書店

森田良行(1980)『基礎日本語2』角川書店

山田敏弘(1995)「ナドとナンカとナンテ ── 話し手の評価を表すとりたて助

詞 ――」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版

Traugott, Elizabeth Closs. 2003. "From subjectification to intersubjectification", in Raymond Hickey (ed.), *Motives for Language Change*, Cambridge University Press, 124-139.

（大学院後期課程学生）

SUMMARY

The Usage of the Particle "*nado*" with Noun:
A Comparative Study between the *Meiji*-Era and the Present

Liandong CHEN

It has been pointed out that there are basically two usages, i. e. "*reiji* [illustration]" and "*hiteiteki-hyoka* [negative evaluation]" in the modern Japanese language particle "*nado*". However, no study has been done regarding how the two usages have been changing until today. This paper is based on examining a large number of examples, collected mainly from the novels of *Meiji*-Era and from the past 20 years (1980-2000). They were examined by the following three viewpoints: (A) "*ikko*" [one noun] or "*tako*" [more than one occurred before "*nado*"], (B) "*tandoku-yoho*" [single form of "*nado*"] or "*hi-tandoku-yoho*" [non-single form], the latter is accompanied by "*kaku-joji*" [case-particle] or "*toritate-joji*" [focus-particle], and (C) affirmative or negative predicate. The particle "*nado*" which occurs after noun(s) has the biggest number of examples. This paper focuses on them and indicates two points.

Firstly, "*hi-tandoku-yoho*" can be seen from *Meiji*-Era until today. It works as "*reiji*" to illustrate that there are something else similar to the noun which occurs before "*nado*". Using more than one noun before "*nado*" is the most common usage of this type.

Secondly, "*tandoku-yoho*" which does not have many examples from the *Meiji*-Era but the number of examples has increased in the last 20 years. Here "*nado*" is preceded by only one noun and followed by a negative predicate working as "*hiteitekih-yoka*". This shows the development from the objective expression of relations among the things in the real world to the subjective expression of the speaker.

キーワード：例示　否定的評価　単独用法　否定述語　明治期からの変化